

第Ⅰ章　序

この報告は、奈良市佐紀町に所在する特別史跡「平城宮跡」の、西面中門から同北門推定地にいたる西面大垣内側の馬寮跡に比定されている地域における、1968年度の第47次調査から、1980年度の第127次調査にいたる8次、9回分の調査結果をまとめたものである。

- * 次章以下においては、調査の成果を遺跡・遺物に分けて報告すると共に、当地域が奈良時代の馬寮、さらに奈良末から平安時代初頭にかけて主馬寮となった官衙の遺跡であることを明らかにしてゆくが、左右の馬寮が共にこの地域に存在したのか、当地域の南方に左右どちらかの馬寮が広がっていたのではないかという点については、不確定要素が多いため今後の課題として残さざるを得なかった。本書の副題として「馬寮地域の調査」と掲げたが、将来あるいは
- * 「左（右）馬寮地域の調査」と改める必要が生ずるかもしれない。

1. 馬寮地域の調査と整備

平城宮跡の発掘調査が継続的に開始されたのは1959年7月のことである。当初は、地元佐紀町の協力者の私宅を借用し調査の基地としていたが、調査の進展にともない、現地に発掘調査の拠点が必要となった。当時の国有地東北隅を選定して発掘調査事務所の建設を計画し、この

- * 地区の発掘調査を行なった（1959年、第3次調査）。遺構の保存に影響を及ぼさないよう配慮したうえ、翌年9月奈良女子大学附属幼稚園の建物を移築して、木造平屋建の平城宮跡発掘調査事務所を建設した。

その後、人員の増加、発見遺物の急激な増加、調査研究の場の確保等の必要から、この地区に遺物収蔵庫・整理室・整図室などのプレハブ建物が逐時増築されたが、調査研究の環境およ

- * び遺物の保管にとっては甚だ不十分であり、また特別史跡の景観保全にも決して好ましい状態ではなかった。1962年に宮域西南隅の開発が計画されたが、発掘調査の進展にともなって遺跡の良好な遺存状況とその重要性が認められ、幅広く保存運動が行なわれた。その結果は国会で取り上げられることとなり、国費による全域買上げの方針が決定され、1963年度から奈良県教育委員会が事務委任を受けて公有化に着手、あわせて同年に保存整備事業も開始された。未指
- * 定であった宮の西部も追加指定され、発掘調査体制も拡充されて1963年に平城宮跡発掘調査部が発足した。

このような状況のもとに発掘調査は進められたが、将来永く継続的に調査を行なってゆくためには、円滑な推進、出土遺物の整理保存の万全をはかり、内裏地区に逐次増築された多数の仮設建物を撤去しその後を整備するために、別の地域に発掘調査の拠点を求める必要があった。

- * 日本万国博覧会が1970年に開催されることが決まるとき、これに連絡して平城宮跡の整備の促進とともに発掘調査の成果を公開する施設の設置が要望された。この頃、平城宮跡においては1965年度に第25次調査として西面中門（佐伯門）の調査が行なわれたが、このあたりの遺構は宮内の他の地区と比べるとかなり密度が薄いことが明らかとなった。そのため、この一部に平

城宮跡発掘調査部の研究室・資料展示部門・遺物収蔵庫を建設する計画が持ち上った。本書において報告する8次にわたる発掘調査の大部分はこの事前調査を兼ねて行なったものである。

これらの調査によって、西面中門から同北門推定地に至る宮西辺地区は馬寮であったと推定されるとともに、研究・展示・収蔵施設を設けるにはこの地区が適当と判断された。宮内の展示施設としては、1966年度から1971年度にかけて、文化庁文化財保護部記念物課によって内裏*東方官衙地区に遺構覆屋が建設されたが、西方地区では、1968年度に第1・第2収蔵庫、1969年度に研究および展示棟が建設され、1970年4月に落成式を行なった。平城宮跡発掘調査部はここに移り、内裏地区の仮設建物を撤去し、跡地を整備した。1971年度には、研究・展示棟と収蔵庫とを結ぶ渡廊下が建設された。

発掘調査が進むと、第1・第2収蔵庫では手狭で出土遺物の収容保管が及ばなくなり、また、*木簡・木製品・金属製品・土器・瓦類などの遺物を整理する場所の確保、木簡・木製品のPEG含浸あるいは真空凍結乾燥法による保存処置およびその他の科学的研究、発掘調査・整備に必要な車輌の収容などのため、1974年度に既存の資料館・収蔵庫の北側に第3収蔵庫、1977年度に第4収蔵庫を建設した。1978・79年度に、県道奈良谷田線（通称一条通り）に沿う佐紀町字大りの宮276-5および279-4番地の土地952m²が買上げられ家屋が撤去されたため、1980年に第127*次調査を行ない、同年度に第4収蔵庫と県道との間を見学者の便益施設として、駐車場・便所・集会広場を整備した。なお、宮跡西側の研究所新庁舎改修工事完了にともない、平城宮跡発掘調査部の研究室は新庁舎に移転、旧研究室部分を見学者説明等に利用する講堂に改修した（資料館・収蔵庫等の建設に関しては巻末の「補論」を参照されたい）。

2. 近年における発掘調査の進展

*

平城宮跡の発掘調査は、1984年夏の第157次調査までに、約29.5ヘクタール行なったが、これは特別史跡指定面積133.1ヘクタールの約22.2%，公有化面積107.4ヘクタールの約27.5%にあたる。この間の成果は『年報』などで逐次報告する一方、発掘調査に関して7冊、木簡に関して3冊、出土墨書土器に関して1冊、出土古瓦に関して9冊、整備に関して1冊の当研究所学報・史料あるいは『基準資料』として公刊してきた。近年の発掘調査の状況は、さき*に『平城宮報告XI』に述べているが、その後の進展のあらましを以下に略記する。

1981年度に水上池尻にあたる民家密集地の東隣りで行なった第129次調査の南に続く地区で、1982年度に第139次調査を行なった。1928（昭和3）年と1932（昭和7）年に岸熊吉氏によって一部調査された東大溝SD2700を約80mにわたって発掘し、大溝の北方に暗渠があり、その前方で東へ分岐する東西方向の大溝があることが判明した。また、内裏北方官衙の東北隅を確認*すると共に、東大溝の東方にも官衙の建物が密集していることを知り得た。³⁾

南辺部では、南面大垣復原整備の事前調査として、1981年度の朱雀門東方の第130次調査に

1) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告XI』第1次大極殿地域の調査（学報第40冊）1981 p. 1～3。以下報告書に関しては『平城宮報告XI』の如く略記する。

2) 岸熊吉「平城宮遺構及遺物の調査報告」（奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告12）1934。
3) 『奈良国立文化財研究所年報1983』p. 19～20。以下年報に関しては『年報1983』等と略記する。

続き、1982年度には朱雀門西方で第143次調査を行ない、朱雀大路の側溝が二条大路南側溝まで伸びていることが判明した。1984年度には、1965年度の第32次調査に続く東端部で第155次調査を行ない、南面大垣、二条大路両側溝、東南隅で大垣を横断する大溝、壬生門心から約187.5m東方で大垣築造以前の南北溝などを検出した。

- * 朱雀門北方に展開する推定第1次朝堂院地域は近年特に調査の重点を置いてきたところである（朝堂院の北に続く第1次大極殿地域の調査結果はさきに『平城宮報告XL』として公刊した）。推定第1次朝堂院地域においては、1976年度の第97次調査以降ほぼ毎年のように調査を進め、1981年度の東南隅における第136次調査、1982年度の東第二堂南端部を含む第140次調査まで、6次にわたる調査によってその東半部の調査をほぼ完了している。この結果、推定第1次朝堂院地域
- * にはまず東部に南北の幹線水路SD3765が掘られるが、まもなくこれを埋め立てて東方に移し(SD3715)、東西幅120m(400天平尺)の位置に木塀SA8410が計画されて掘立柱掘形が掘られるが、柱を立てずに埋めもどし、東西幅約214m(720尺)、南北長約284m(960尺)を木塀で囲む。木塀は後に築垣に取り替えられ、郭内には2棟の長大な基壇建物が南北に並んで建てられた。東第一堂SB8400は桁行10間、4.4m(15尺)等間、第二堂SB8550は桁行21間、4.4m(15尺)等間、梁行はいずれも4間、3.2m(11尺)等間で、両建物とも特殊な基礎地業を行なっている。また、第二堂の南に仮設的な建物が並び、その西に北に向って3条の杭列があり、これは競馬・騎射などの行事に用いられた施設と推定された。

推定第1次朝堂院の南に朝集殿に当る建物とそれを囲む施設が存在したかどうかも、この地域の性格を検討するうえで重要な課題である。そのため1982年度の第146次調査・1983年度の

- * 第150次調査・1984年度の第157次調査を行なった。朝集殿自体はまだ確認されておらず、推定第1次朝堂院の前には朝集殿に当る建物はなかった可能性が高くなっているが、朝堂院東面築垣の延長上に凝灰岩切石の暗渠があり、築垣も一部検出されて、朝堂院前方には築垣によって囲まれた空間が存在していたことは確かとなった。第157次調査は朱雀門内東方で行ない、掘立柱塀が東へ延びて大垣との間が宮内道路となることが判明したが、推定第1次朝堂院東面築垣の延長部がこの地区では現水路と重複するため、朝堂院前面区画の東南隅の状況は確認されていない。なお、朝堂院南部および朝集殿推定地の第140・146・150次調査では、4世紀末から6世紀初頭にわたる堅穴住居群、堰状施設をともなう川、溝、土塘などが発見されて、このあたりの古墳時代の様相も明らかになってきた。

第2次大極殿朝堂院地域は、かつて1924(大正13)年に整備に伴う調査によって大極殿回廊

- * 基壇と雨落溝の一部を発見し、1955(昭和30)年には回廊東南隅の調査を行なってこれを平城宮の第1次調査にあてている。その後も、大極殿・同後殿および北面回廊東半・大極殿東楼・東朝集殿の発掘調査を行なっているが、大部分は未調査である。大極殿および後殿の調査(第113次・132次)の際に掘立柱の下層遺構が発見され、第1次大極殿=朝堂院地域と併せて平城宮

1)『年報1983』p.32。

告2) 1935。

2)『年報1982』p.36~37,『年報1983』p.21~22。

5)『平城宮跡第1次発掘調査報告』(奈良国立文化財研究所学報第10冊)1961。

3)『年報1982』p.36~37,『年報1983』p.24,

6)『年報1979』p.1~4,『年報1982』p.6~8,
『年報1969』p.38~44,『年報1972』p.31~35。

『年報1984』p.21。

4)上田三平『史蹟名勝調査報告』(史蹟調査報

中心部の複雑な状況は早急に解明すべき重要な問題である。このため、1983年度から、第2次大極殿院=朝堂院の調査を重点的に進めることとした。1983年度には大極殿院閣門、同南面および東面回廊を中心に第152・153次両調査を行ない、この一郭の規模を明らかにすると共に大極殿前方に複雑に重複する掘立柱遺構を検出している。これらの掘立柱遺構は、鳥形・日月の幢、四神の幡を立てた宝幢の跡や舞台状あるいは廊状遺構などで、大極殿で行なわれた儀式に * 関連する重要な発見であった。掘立柱の下層建物も正殿の前に南門、北に後殿を備え、掘立柱 * 屋で囲んだ状況が明らかとなり、今後の第2次朝堂院地域の調査の進展に期すところがますます大きくなっている。

内裏・第2次大極殿東方の官衙地域は、1964年度から1970年度にかけて9次の調査を行ない、一部では遺構覆屋の建設、建物の復原が行なわれているが、この地域の状況を総体的に明らかにするために1983年度に第154次調査を行ない、大極殿東外郭東門および埠積基壇建物を持つ特異な官衙に接する広場的空間の存在を確認した。また2木の大溝から木簡や木とんぼ、銅製人形など多数の遺物を発見した。

平城京に関する調査はそのほとんどが開発計画に伴う事前調査であるが、近年の大規模なものとしては1983年度の大和郡山市九条町の右京八条一坊十一坪における第149次調査がある。 * 坪内の遺跡の状況は良くなかったが、西一坊坊間路が一坊大路なみの幅員をもち、特に西側溝は約10mの幅があって東堀河に匹敵することが明らかとなった。

その他、中小規模の発掘調査は数多く、重要な成果があがったものも少なくない。1981年度における右京二条二坊十六坪の第137次調査、左京三条四坊三坪の第138次調査では、坪内の地割りや掘立柱建物群の配置・変遷の状況を確認した。1982年度に行なった太安麻呂の居住地で * あった左京四条四坊九坪の第141-9次調査においては、九坪の一部分の調査ではあったが、四坊坊間路の幅員を確認し、3期にわたる遺構の変遷が明らかとなり、また羊を形どった珍しい形象硯や巻錢の状態の100枚近い和同錢などの重要な遺物の発見があった。藤原仲麻呂の田村第推定地に含まれる左京四条二坊十五坪の第145次調査では、3期にわたる遺構のうち第2期は礎石建ちの正殿と脇殿で構成され、この時期には少なくとも西側の十坪を含めて2坪以上の敷地を形成していたことが判明し、同じ九坪内における1984年度の第156-8次調査においても5期の遺構を確認した。

北辺坊における調査では、称徳天皇御山荘跡と伝承する中島を持つ苑池西の、1937年開基勝宝金錢出土地に隣接する右京一条北辺四坊八坪で、1983年度に第156-26次調査を行ない、大型の掘立柱建物を含む計画的配置の建物群が確認された。山荘跡の可能性が強まるとともに、北 * 辺坊の状況の一端が明らかとなった。また、9世紀前半の灰釉骨蔵器が発見され、平安時代にはこの地が葬地となつたことも知られた。

1)『年報1984』p.22~25

1982。

2)『年報1984』p.26。

5)奈良国立文化財研究所『平城京左京四条四坊九坪発掘調査報告』1983。

3)奈良国立文化財研究所『平城京右京八条一坊十一坪発掘調査報告書』1984。

6)『年報1983』p.26。

4)『年報1982』p.38~40、奈良国立文化財研究所『平城京右京二条二坊十六坪発掘調査概報』

7)奈良国立文化財研究所『平城京右京一条北辺四坊六坪発掘調査報告』1984。

このほか、左京二条二坊十三坪の第141-5次（1982年度）および第151-11次（1983年度）、同三条二坊三坪の第151-32次（1983年度）、同四条二坊一坪の第151-1次（1983年度）、同四条二坊三坪の第141-31次（1982年度）、同九条三坊三坪の第148次（1982年度）、右京二条二坊十六坪の第151-22次（1983年度）、同二条三坊十二坪の第156-10次（1984年度）、同三条三坊十五坪の第141-26次

- *（1982年度）などで坪内の顯著な遺構を確認した。条坊関係の調査成果では、左京九条三坊条間路と東堀河の交点（第141-23次調査）で、豊富な遺物とともに橋の材料と焼損した建築部材が発見されている。京東南隅に近い五徳池の西における第141-37次および第151-30次調査では九条大路側溝を、羅城門西方では1980年度の第125次、1981年度の同補足調査につづき、1983年度の第125-4次調査においても九条大路北側溝を検出した。また、左京三条二坊二坪の第141-25
- * 次調査では朱雀大路東側溝と築垣跡を確認している。

当研究所による調査のほか、奈良市教育委員会の京内の発掘調査でも、1979年度の左京五条二坊十四坪、1981年度の左京五条五坊七坪・十坪、1982年度の左京二条二坊十二坪、1983年度の同三条五坊四坪、1984年度の同五条一・八坪、1981～83年度の東市北辺部をはじめ、各所で貴重な成果が挙げられているが、平城京の調査については今後に残された課題が多い。

- * 京内寺院の調査では、西大寺東塔、薬師寺南大門・同中門・同苑院推定地などの調査があり、とくに1982年度の薬師寺中門は再建計画に伴う全面調査であった。

3. 保存整備の進展状況

平城宮跡の整備は、1963年度に奈良県教育委員会によって始められ、1970年度から当研究所が引き継いでいる。近年の事業では南面大垣の復原が第一にあげられる。1982年度には朱雀門

- * を挟む南面中央部で各々長さ約50mを再現した。いずれも第130次および第143次調査で事前調査を行ない、発掘調査の成果と関係資料により、下幅2.7m、総高5.6mに復原した。地下遺構の保存や管理上などの理由から、基礎は浅い鉄筋コンクリートベタ基礎とし、壁体は本来版築の技法によったものであるが、骨組を鉄骨造、表面は土質の実感を生かすために土塗壁、中塗仕上げとし、桁・梁・軒・屋根は伝統的技法により、木部は朱土塗とした。1983年度には同じ
- * 工法によって南面西端部を復原した。その他の南面大垣部分は、凝灰岩切石で大垣と同じ幅の低い壇を作つて植栽を行ない、前面には二条大路側溝を復原し、二条大路路面および宮の壙地には適宜植栽して宮南辺部の整備を進め、1982・83年度に西半の大部分を完了した。南面大垣の一部復原によってその中央に建っていた朱雀門やその前面の朱雀大路の復原整備を促進し、南辺部の古都景観が直接的に理解できるようになるものと期待される。

- * 1982年度には第2次大極殿後殿および北面回廊東半部の基壇を復原し、また第139次調査を

1) 奈良国立文化財研究所『平城京左京二条二坊十三坪の発掘調査』1984。奈良県教育委員会『平城京左京四条二坊一坪発掘調査報告』1984。奈良国立文化財研究所『平城京左京三条二坊三坪発掘調査報告』1984。

2) 奈良国立文化財研究所『平城京東堀河 左京九条三坊の発掘調査』1983。

3) 奈良市教育委員会『市道九条線関係遺跡発掘調査概報(I)・(II)』1983・84。

4) 奈良国立文化財研究所『平城京朱雀大路発掘調査報告1982』1983。

5) 奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査報告書昭和54年度～58年度』1980～84。

6) 『年報1983』p.10～11。

行なった北方官衙地区で、東大溝を含め遺構配置表示を行ない、その地区的構成を理解できるようにした。1984年度には第152・153次調査の成果により、第2次大極殿院閣門および南面回廊東半部・東面回廊の基壇復原を行ない、また内裏東方官衙地区の一部において版築の技法による築垣の一部復原を計画している。その他、未発掘地では将来の発掘調査を期して水系整備、土中の遺構・遺物の保存と修景を兼ねて草園整備などを進めている。

4. 報告書の作製

発掘調査にたずさわった関係者は極めて多く、すでに当研究所を去り他機関において活躍されている者もかなりの数にのぼる。ここでは先に発掘責任者（所長・部長）と発掘調査担当者名を掲げ、その他の関係者については一括して列記する。

次 数	発掘年度	所 長	部 長	発掘調査担当者	*
第 47 次	(1968年)	林 剛	坪井 清 足	高島 忠 平	
第 50 次	(1968年)			石松 好 雄	
第 51 次	(1968年)			佐原 真	
第 52 次	(1968年)			森 郁 夫	
第 59 次 北	(1969年)	松 下 隆 章		町 田 章	
第 59 次 南	(1969年)			伊 東 太 作	
第 63 次	(1970年)			田 中 卓 雄	
第 71 次	(1970年)			村 上 計 一	
第 88-1 次	(1974年)	内 山 正	鈴 木 嘉 吉	中 村 雅 治	
第 88-13 次	(1974年)	川 修 三		岩 本 正 二	
第103-14次	(1977年)	坪 井 清 足	野 久	小 林 謙 一	
第 127 次	(1980年)		岡 田 英 男	上 原 真 人	
安達厚三 阿部義平 天田起雄 石井則孝 井上和人 稲田孝司 牛川喜幸 小笠原好彦 甲斐忠 彦 加藤允彦 加藤優 狩野久 河原純之 鬼頭清明 木下正史 栗原和彦 黒崎直 佐藤興治 沢村仁 菅原正明 巽淳一郎 田辺征夫 東野治之 西弘海 西谷正 西村康 八賀晋 藤井功 藤原武二 藤村泉 細見啓三 松下正司 宮沢智士 宮本長二郎 三輪嘉六 本村豪章 山岸常人 山沢義貴 山中敏史 山本忠尚 吉田恵二 横田拓実 横田義章（あいうえお順）		*			

報告書の作製は1981年度から開始し、遺構関係の整理については遺構調査室・計測修景調査室があたり、遺物については考古第一・第二・第三調査室および史料調査室が分担した。1982年度以降、執筆分担を中心とした検討会を隨時行ない、遺構の配置・時期変遷等を中心に討議を重ね、全体の構想をとりまとめていった。この間、研究員の移動があり、執筆分担者の変更を余儀なくされたこともあり、3年間余を費してようやく出版のはこびとなった。執筆分担はつぎのとおりである。

第 I 章 1・2・3	岡田英男, 4	山本忠尚
第 II 章 1・2・3	山本忠尚	
第 III 章	高瀬要一, 2-A~E	龟井伸雄（現奈良市教育委員会文化財課長） 2-F・G 上野邦 2-H 山本忠尚
第 IV 章 1	清田善樹（現福井県立朝倉氏遺跡資料館学芸員）	2 岩永省三, 3 巽淳一郎, 4~6 杉山洋
第 V 章 1・5	山本忠尚, 2 佐藤信, 3 巽淳一郎, 4 光谷拓実	
補 論	内田昭人	
英文要旨	山本忠尚	

遺構・遺物の写真撮影は八幡扶桑・佃幹雄が、木質遺物の樹種鑑定は光谷拓実が行なった。

本書の編集は、岡田英男の指導のもと山本忠尚が担当し、石川千恵子が助力した。また、図面整書はそれぞれ執筆担当者が分担し、上野雄一（千葉大学大学院生）・林利治（奈良大学 OB）の補助があった。